

# 中方遺跡Ⅱ

—佐東川河川改修事業に伴う発掘調査報告書—

1990

静岡県小笠郡大東町教育委員会



# 中方遺跡Ⅱ

—佐東川河川改修事業に伴う発掘調査報告書—

1990

静岡県小笠郡大東町教育委員会



## 例 言

1. 本書は、静岡県小笠郡大東町中方富士ヶ森376地先に所在する中方遺跡の発掘調査報告書である。
2. 調査は佐東川河川改修事業に伴うもので、袋井土木事務所の委託を受け、静岡県教育委員会文化課の指導の下、大東町教育委員会が実施した。
3. 発掘調査は、平成元年10月18日から平成2年2月9日にわたり実施した。
4. 調査は大東町教育委員会の主体で、鬼澤勝人（社会教育課）を担当者として実施した。
5. 調査の開始より報告書の作成に至るまで下記の方々にご指導・ご協力をいただいた。

（順不同・敬称略）

五島康司・渋谷昌彦・坂巻隆一・渡辺康弘・河合修・森威史

6. 出土品等の整理及び本書の作成は、鬼澤が行なった。
7. 本書発行までの一切の事務は、大東町教育委員会が行なった。尚、調査資料は全て大東町教育委員会が保管している。
8. 作業員  
相澤友次・井垣忠志・鈴木豊治・中井己未・前島隆・増田秀一

## 目 次

I. 調査に至る経緯と調査経過	1
II. 遺構について	2
III. 遺構から出土した遺物	4
IV. 包含層から出土した遺物	10
V. 確認調査について	14
VI. まとめ	21



## I. 調査に至る経緯と調査経過

中方遺跡は、大東町中方字富士ヶ森376地先があり、遺跡中央を佐東川が流れている。この川は後世の改修により直線的に河道が変更されており、古い図面には西側丘陵の裾に沿って蛇行している姿が描かれていることから、中方遺跡が分断されたようである。また、川の周囲には、弥生式土器や土師器・須恵器などが散布する中方北遺跡や高瀬遺跡が確認されており、この水源を中心に人々の営みがあったことが窺える。さらに、兩岸の丘陵斜面には多くの横穴が確認されており、弥生時代から古墳時代、古代と連続とした歴史があったと思われる。しかし、周辺の発掘調査は清水ヶ谷横穴群・松ヶ谷横穴、鳥見ヶ谷横穴群の調査のみで詳細は不明である。

今回、袋井土木事務所の一級河川「佐東川小規模河川改修」の護岸工事に伴う発掘調査及び確認調査を行った。昭和63年度（1988）の確認調査で今回の工事地点において、8層ある土層のうち第4層と第7層に遺跡が存在していることが明らかにされていたが、住居址ではないかと思われる土坑が確認された第2グリッドと、遺物が特に多く出土した第4グリッドを拡張して本調査を行った。

また、来年度以降の工事地点の確認調査については、前年度の調査地点からさらに上流へ9ヶ所のグリッドを設定し、下流から順にNo.1・2…と呼称した。調査は、平成元年10月18日から平成2年2月9日にわたり実施した。



第1図 中方遺跡 周辺遺跡分布図

- |            |           |             |             |            |
|------------|-----------|-------------|-------------|------------|
| 1. 中方遺跡    | 2. 高瀬遺跡   | 3. 天王前遺跡    | 4. 天王谷横穴群   | 5. 鳥見ヶ谷横穴群 |
| 6. 金比羅山古墳  | 7. 山崎横穴群  | 8. 山田ヶ谷B横穴群 | 9. 山田ヶ谷A横穴群 | 10. 中方B横穴群 |
| 11. 中方A横穴群 | 12. 松ヶ谷横穴 | 13. 清水ヶ谷横穴群 | 14. 城山遺跡    | 15. ハッ谷横穴群 |
| 16. 穴口横穴群  | 17. 玉体横穴群 | 18. 丸山古墳    | 19. 笹ヶ谷横穴群  | 20. 中方北遺跡  |

## II. 遺構について

### ① 1号土坑

昭和63年度の確認調査で検出され、住居址と考えられた遺構である。平面プランはやや歪んだ楕円形で、長辺は約3.70m、短辺は2.35m、最大深0.16mを測る。床面は、緩やかな傾斜で南に下がっている。

土坑内の堆積土は、しまりがあり粘性がやや強く酸化鉄を多量に含む黄褐色粘土層の上層と、しまりがあり粘性が強く酸化鉄を含む灰黄褐色粘土層との2層に分層される。

土坑内より、柱穴・炉跡などの遺構は検出されず、住居址の可能性は低いと考えられる。

遺物は土坑内北側に集中して出土しており、弥生土器の破片、須恵器及び土師器の破片が出土している。

### ② 2号土坑

平面プランは隅丸方形を呈し、長辺は2.94m、短辺は1.78m、最大深0.13mを測る。床面は、西にやや傾いている。河川改修事業という限定された調査範囲のため、遺構の全体を把握できる状況での検出はされていない。

土坑内の上は、しまりがあり粘性がやや強く酸化鉄を多量に含む黄褐色土層の上層と、しまりがあり粘性が強く酸化鉄を含む灰褐色土層との2層に分層される。

1号土坑と同様、柱穴・炉跡などの遺構は検出されず、住居址の可能性は低いと考えられる。

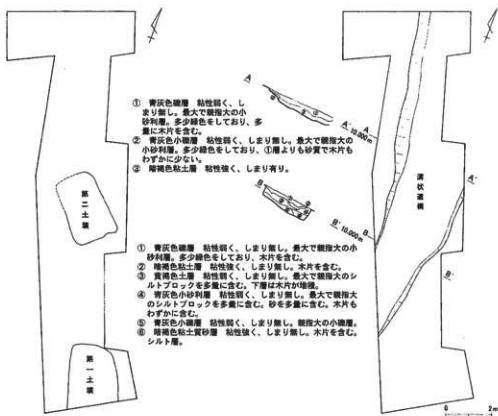
遺物の出土も1号土坑と同様、北側に集中して出土しており、弥生土器の破片、須恵器及び土師器の破片が出土している。

### ③ 溝状遺構

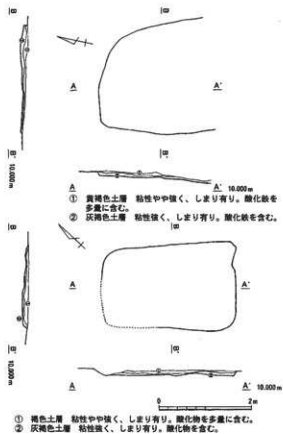
1号・2号土坑検出面をさらに1.3m掘り下げた面で、2号土坑の真下位置から検出された。溝の方向は南北に延びている。しかし、2号土坑と同様に、遺構の全体を把握できる状況での検出はされていない。従って、確認長で約12m、幅2.2～3.5m、最大深さは約0.63mを測り、南へ進むにしたがい狭くなっている。覆土は6層に分層され、木片が多量に混入している。

遺物は、遺構上面及び覆土中から出土しており、弥生土器の破片、須恵器及び土師器の破片が出土している。

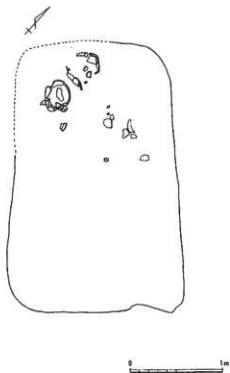




第2図 1・2号土坑、溝状遺構 全測図



第3図 1・2号土坑 遺構図

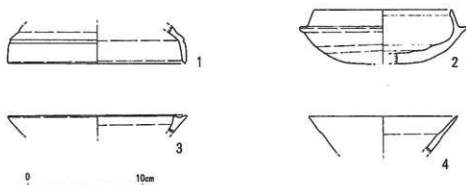


第4図 2号土坑 遺物出土状態図

### Ⅲ. 遺構から出土した遺物

#### ① 1号土坑

1号土坑からは須恵器の破片が11点（口縁部片7点、体部片4点）、土師器の破片が4点（口縁部片1点、体部片3点）、弥生土器の体部片が55点の合計70点出土し、弥生土器の破片が79%を占めている。このうち、図化が可能な須恵器3点と土師器1点を図示した。第5図1～3は須恵器で、4は土師器である。1は坏蓋の口縁部片で、推定口径が15.60cmある。体部と口縁部との境で屈曲し、口縁部との境に一条の横位の沈線を施している。口縁部は直線的に下がっている。内外面ともナデ調整され、色調は灰白色を呈し、胎土は密である。2は坏身で、推定口径が11.90cm、器高が4.50cm、推定最大径が14.80cmある。平底から内湾しながら立ち上がり口縁部との境に受けを持ち、口縁部は内傾している。外面の底部から体部下半はヘラ削りし、体部上半から口縁部はナデ調整している。内面の底部は静止ナデ調整、体部から口縁部はナデ調整し、ノタ目が遺っている。色調は灰色を呈し、胎土は密で、白色粒子を含んでいる。3は高坏の口縁部片で、推定口径が15.60cmある。口縁端部に受けを持つ。内外面とも摩耗により調整は不明瞭である。色調は灰白色を呈し、胎土は密である。4は土師器の高坏の口縁部片で、推定口径が13.00cmある。体部から直線的に開き、口縁部で器壁が薄くなっている。内外面ともナデ調整している。色調は橙色を呈し、胎土は密で、白色・赤色粒子を僅かに含んでいる。



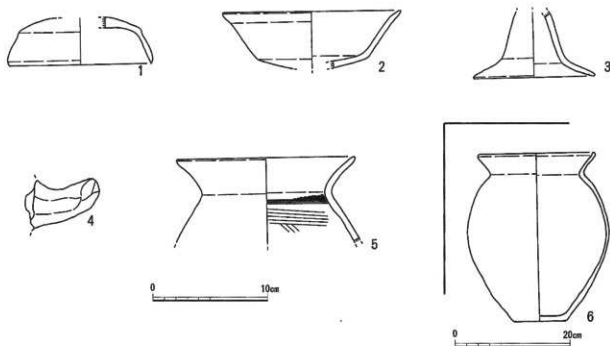
第5図 1号土坑から出土した土器の実測図

1 須恵器坏蓋、2 須恵器坏身、3 須恵器高坏の口縁部片、4 土師器高坏の坏部片

#### ② 2号土坑

2号土坑からは須恵器の破片が9点（蓋1点、体部片8点）、土師器の破片が34点（模倣坏蓋1点、甕1点、口縁部片4点、体部片24点、把手1点、底部片1点、脚部片1点、高坏の坏部片1点）、弥生土器の破片が143点（口縁部片2点、体部片139点、底部片2点）の合計186点出土し、弥生土器の破片が77%を占めている。このうち、図化が可能な土師器6点を図示した。第6図1は土師器の模倣坏蓋で、推定口径が12.35cm、推定器高が4.20cmある。平らな天井部から大きく開きながら下がり、体部上半で屈曲し、口縁部は直線的に開き、端部を尖らせている。内外面とも摩耗により調整は不明瞭である。色調は橙色を呈し、胎土に黒色・赤色粒子を含んでいる。2は土師器の高坏の坏部片で、推定口径が15.40cmある。底部は直線的に大きく開き、体部下半で屈曲し、口縁部は緩やかに外反する。内外面とも摩耗により調整は不明瞭である。色調は橙色を呈し、胎土に白色粒子を僅かに含んでいる。3は土師器の高

坏の脚部片で、推定脚径が10.60cmある。脚部は「ハ」の字状に開きながら下がり、裾部でさらに大きく開く。内外面とも摩耗により調整は不明瞭である。色調は橙色を呈し、胎土は密で雲母を含んでいる。4は土師器の甕の把手で、長さ5.05cm、幅3.90cmあり、牛角状をしている。外面は摩耗により調整は不明瞭である。色調はにぶい橙色を呈し、胎土に1～3mm大の砂粒子を多く含んでいる。5は土師器の壺の体部上半から口縁部にかけての破片で、推定口径が15.30cmある。体部上半は緩やかに内傾し、頸部は「く」の字状に屈曲し、口縁部はやや外反気味である。口縁部の外面はナデ調整され、内面は頸部に刷毛目痕が見られ、体部は甕ナデ調整がされている。6は土師器の甕で、口径が20.60cm、器高が29.50cm、底径が9.00cmある。平底から大きく開きながら立ち上がり、体部中位に最大径がある。体部上半は緩やかに内傾し、頸部は「く」の字状に屈曲する。口縁部は直線的に開き、端部は上に延びる。内外面とも摩耗により調整は不明瞭である。色調はにぶい橙色を呈し、胎土に砂粒子を多く含んでいる。

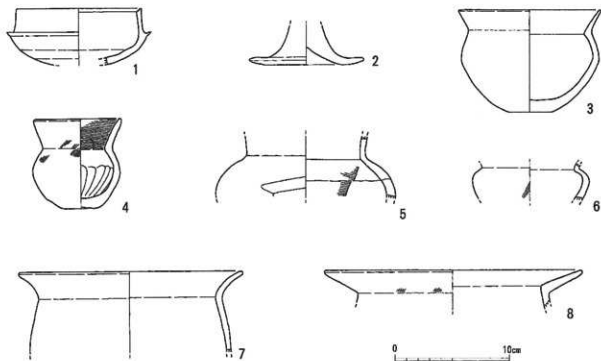


第6図 2号土坑から出土した土師器の実測図

1 横置坏壺、2 高坏の坏部、3 高坏の脚部、4 甕の把手、5 壺の体部上半、6 甕

### ③ 溝状遺構

溝状遺構の上面からは須恵器の破片が1点(坏身1点)、土師器の破片が15点(小型壺4点、高坏脚部片1点、甕の口縁部片2点、口縁部片2点、体部片6点)、弥生土器の破片が33点(口縁部片1点、頸部片1点、体部片30点、底部片1点)の合計49点出土し、弥生土器の破片が67%を占めている。このうち、図化が可能な須恵器1点、土師器6点と弥生土器1点を図示した。第7図1は須恵器、2～7は土師器、8は弥生土器である。1は須恵器の坏身で、推定口径が10.00cm、推定器高が4.80cm、推定最大径が12.60cmある。底部から大きく開きながら立ち上がり、口縁部との間に受けを持つ。口縁部は垂直に立ち、端部の内側を面取りしている。外面の体部下半はヘラ削り、体部上半から口縁部はナデ調整し、内面はナデ調整している。色調は灰色を呈し、胎土は密で、白色粒子を少し含んでいる。2は土師



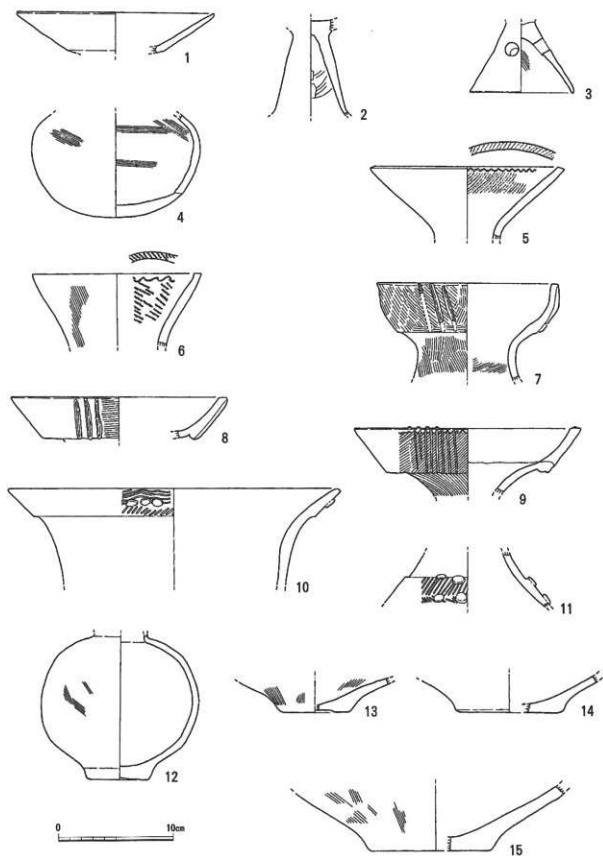
第7図 溝状遺構の上面から出土した土器の実測図

- 1 須恵器坏身、2 土師器高坏の脚部、3・4 土師器甕、  
5 土師器甕、6 土師器小型甕、7 土師器甕、8 弥生土器甕

器の高坏の脚部片で、脚径が10.20cmある。裾部は反り返り、空洞部は浅い。内外面とも摩耗により調整は不明瞭である。色調は橙色を呈し、胎土に砂粒子を少し含んでいる。3は土師器の甕で、推定口径が12.10cm、推定器高が8.80cm、推定底径が3.80cmある。平底から内湾気味に開きながら立ち上がり、体部中位よりやや上で最大径となり、内傾して頸部は「く」の字状に屈曲し、口縁部は開いている。外面は摩耗により調整は不明瞭で、内面はナデ調整している。色調は橙色を呈し、胎土に1～3mm大の砂粒子を多く含んでいる。4も土師器の甕で、推定口径が7.70cm、器高が7.80cm、底径が2.80cmある。上げ底気味の底部から内湾しながら立ち上がり、体部中位から内傾し、口縁部は直線的に開いている。外面は底部から体部にかけてナデ調整し、体部上半に斜位の刷毛目痕が見られる。口縁部は横ナデ調整と斜位の刷毛目痕が見られる。内面は底部に指頭によるナデ調整がなされ、口縁部は横位の刷毛目痕が見られる。色調はにぶい橙色を呈し、胎土に2mm大の砂粒子を少し含んでいる。5は土師器の甕の肩部から頸部にかけての破片で、推定最大径が15.65cmある。体部は球形を呈すると思われる、最大径は上半にあり、緩やかに内傾し、頸部は「く」の字状に屈曲する。口縁部は直線的に立っている。外面はへら削りとナデ調整され、内面は体部に掃目痕、口縁部にナデ調整がなされている。色調はにぶい橙色を呈し、胎土は密である。6は土師器の小型甕の体部から頸部にかけての破片で、推定最大径が11.00cmある。体部は開きながら立ち上がり、最大径は上半にあり、内傾して頸部は「く」の字状に屈曲する。外面に刷毛目痕が見られ、内面はナデ調整されている。色調は橙色を呈し、胎土に砂粒子を含んでいる。7は土師器の甕の体部上半から口縁部にかけての破片で、推定口径が19.60cmある。体部上半は緩やかに立ち上がり、頸部からラッパ状に開いている。内外面とも摩耗により調整は不明瞭である。色調は赤橙色を呈し、胎土は粗く、2mm大の砂粒子を多く含んでいる。8は弥生土器の甕の頸部から口縁部にかけて

の破片で、推定口径が20.60cmある。頸部は「く」の字状に屈曲し、口縁部は直線的に大きく開き、端部は丸く収めている。外面は僅かに刷毛目痕が見られ、内面はナデ調整されている。色調はにぶい橙色を呈し、胎土は粗く、1～3mm大の砂粒子を多く含んでいる。

溝状遺構の覆上からは須恵器の底部片が1点、土師器の破片が14点（壺1点、高環脚部片2点、口縁部片2点、体部片9点）、弥生土器の破片が549点（口縁部片33点、頸部片8点、肩部片3点、体部片477点、底部片16点、壺の口縁部片1点、壺の底部片1点、脚部片1点、甕の台部片9点）の合計564点出土し、弥生土器の破片が97%を占めている。このうち、図化が可能な土師器4点と弥生土器16点を図示した。第8図1～7は土師器、8～15と第9図16～20は弥生土器である。1は土師器の高環の坏部で、推定口径が17.40cmある。体部下位で屈曲し、直線的に大きく開いている。内外面とも摩耗により調整は不明瞭である。色調はにぶい黄褐色を呈し、胎土は密である。2・3は土師器の高環の脚部である。2は、坏部の底は平らで、脚部は「ハ」の字状に狭く開き、裾部で屈曲し、大きく開くと思われる。外面は摩耗により調整は不明瞭である。内面は捻りながら掻き出した痕が見られる。色調は橙色を呈し、胎土は密である。3は脚径が9.20cmある。脚部は「ハ」の字状に真っ直ぐ開き、裾部が僅かに内湾する。四方向に径1.10cmの孔が空けられている。外面は摩耗により調整は不明瞭である。内面は刷毛目痕が見られる。色調は外面が灰色～淡赤褐色を呈し、内面は灰色を呈している。胎土は密である。4は土師器の壺で、口縁部から体部上半を欠いている。体部の最大径が14.80cmある。丸底から内湾しながら立ち上がり、体部上半で最大径となり、次第に内傾する。外面は体部上半に斜位の刷毛目痕が、内面は体部に刷毛目痕が見られ、底部はナデ調整されている。色調は橙色を呈し、胎土に1mm大の砂粒子を多く含んでいる。5～10は弥生土器の壺の口縁部片である。5は口径が17.00cmある。頸部から直線的に大きく開き、口縁端部はやや斜めに面取している。外面は摩耗により調整は不明瞭である。内面は口縁部に横位の波状紋を、その下位に斜位の燃糸紋を施し、口唇部にも燃糸紋を施している。色調は淡褐色を呈し、胎土に1～3mm大の砂粒子を多く含んでいる。6は推定口径が14.90cmある。口縁部は外反気味に開き、端部は僅かに内湾し、平らに収めている。外面は刷毛目痕が見られ、口唇部に燃糸紋を施している。内面は口縁部に結節縄紋を施している。色調はにぶい橙色を呈し、胎土は粗く、砂粒子を多く含んでいる。7は推定口径が16.00cmある。頸部から外反して開き、口縁部は内湾し、端部は平らに収めている。複合口縁で、棒状浮紋（3本）がやや斜めに施されている。外面は頸部と口縁部に縦位・斜位の刷毛目痕が、内面は頸部に横位の刷毛目痕が見られ、口縁部は横ナデ調整されている。色調はにぶい橙色を呈し、胎土は普通で、1～2mm大の砂粒子を多く含んでいる。8は推定口径が19.00cmある。複合口縁で、端部は平らに収めている。棒状浮紋（3本）がやや斜めに施されている。外面は横位の刷毛目痕が見られ、内面は横ナデ調整されている。色調はにぶい橙色を呈し、胎土は普通で、砂粒子を含んでいる。9は推定口径が19.90cmある。頸部から外反して開き、口縁部は直線的に開く。端部は平らに収めている。複合口縁で、口唇部に径5mmのボタン状浮紋（1単位4個）が施されている。外面は口縁部に横位の波状沈線紋と斜位の刷毛目痕あり、その上に縦位の8本の沈線紋を施している。頸部は斜位の刷毛目痕が見られる。内面はナデ調整されている。色調は灰色を呈し、胎土は普通で、1～2mm大の砂粒子を多く含んでいる。10は推定口径が24.80cmある。頸部からラッパ状に開く。口縁部は複合口縁で、外面に横位の波状紋と斜位の櫛目紋を施し、その上に1単位3個の浮紋を施している。内面は摩耗により調整は不明瞭である。色調は黄灰色を呈し、胎土は粗く、2mm以下の砂粒子を多く含んでいる。11は弥生土器の壺の肩部片で、外反気味に内傾している。外面は櫛目紋の上に1単位4個の浮紋を施している。色調は浅黄褐色を呈し、胎土に1mm大の砂粒子を含んでいる。12は弥生土器の壺で、口縁部を欠い

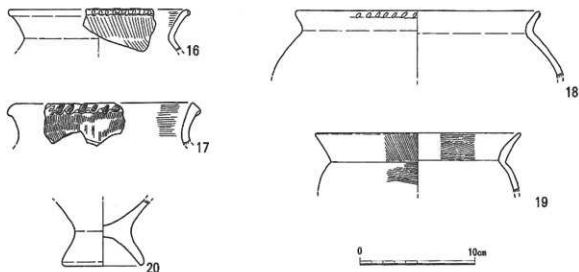


第8図 溝状遺構の覆土から出土した土器の実測図(1)

- 1 土師器高杯の坏部、2・3 土師器高杯の脚部、4 土師器蓋、5～10 弥生土器蓋の口縁部、  
11 弥生土器蓋の肩部、12 弥生土器蓋、13～15 弥生土器蓋の底部

ている。最大径が13.90cm、底径が5.60cmある。体部は球形を呈している。やや上げ底気味の底部から大きく開きながら立ち上がり、体部中位で最大径となる。外面は僅かに刷毛目痕が見られ、内面は摩耗により調整は不明瞭である。色調はにぶい橙色を呈し、胎土に1mm大の砂粒子を多く含んでいる。13は弥生土器の壺の底部片である。13は底径が6.00cmある。上げ底の底部から大きく開きながら立ち上がる。外面に刷毛目痕が見られ、内面は調整が不明瞭であるが、僅かに刷毛目痕が見られる。色調は外面が橙色、内面が暗灰黄色を呈し、胎土は粗く、1～2mm大の砂粒子を多く含んでいる。14は底径が9.80cmある。平底から大きく開いて立ち上がる。内外面とも摩耗により調整は不明瞭である。色調は明褐色を呈し、胎土は粗く、1～2mm大の砂粒子を多く含んでいる。15は推定底径が10.60cmある。平底から直線的に大きく開いて立ち上がる。外面は刷毛目痕が見られ、内面は摩耗により調整は不明瞭である。色調は明褐色を呈し、胎土に砂粒子を多く含んでいる。

第9図16～19は弥生土器の甕の口縁部片である。16は推定口径が15.80cmある。頸部は「く」の字状に屈曲し、口縁部は外反気味に開いている。口唇部に刻み目があり、口縁部の外面に斜位の刷毛目痕が見られる。内面は横位の刷毛目痕が見られる。色調はにぶい浅黄橙色を呈し、胎土は普通で、1～2mm大の砂粒子を多く含んでいる。17は推定口径が15.40cmある。頸部は「く」の字状に屈曲し、口縁部は外反気味に開いている。口唇部に刻み目があり、口縁部の外面に縦位の刷毛目痕が見られる。内面は横位の刷毛目痕が見られる。色調はにぶい淡赤橙色を呈し、胎土はやや粗い。18は推定口径が21.00cmある。体部上半は緩やかに内傾し、頸部は「く」の字状に屈曲する。口縁部は直線的に開き、口唇部に刻み目がある。内外面とも摩耗により調整は不明瞭である。色調は淡赤橙色を呈し、胎土は粗く、1～2mm大の砂粒子を多く含んでいる。19は推定口径が18.00cmある。頸部は「く」の字状に屈曲し、口縁部は直線的に開いている。外面は口縁部に斜位の刷毛目痕が見られ、肩部に横位の刷毛目痕が見られる。内面は口縁部に横位と斜位の刷毛目痕が見られる。色調は灰褐色を呈し、胎土は普通で、1～2mm大の砂粒子を含んでいる。20は弥生土器の甕の台部片で、台部径が7.20cmある。底部から体部は直線的に大



第9図 溝沢遺構の覆土から出土した土器の実測図(2)

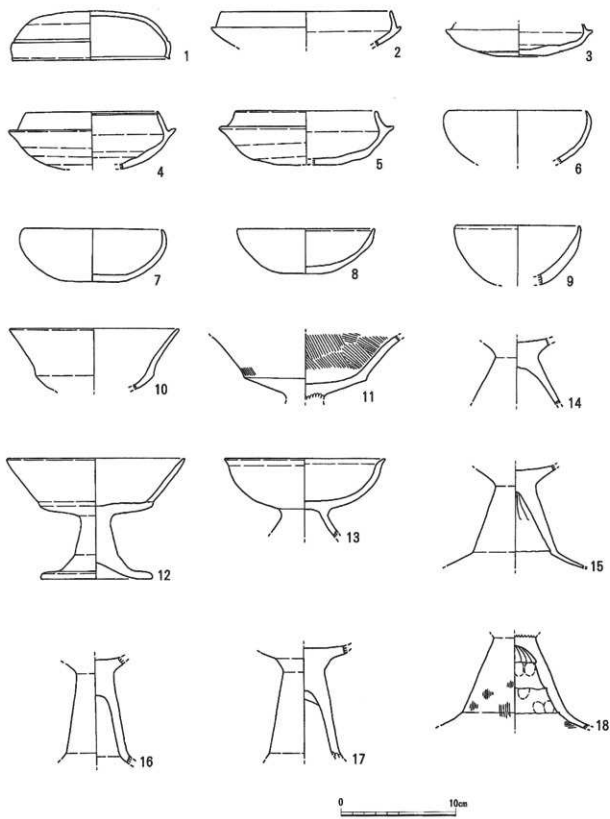
16～19 弥生土器甕の口縁部、20 弥生土器甕の台部

きく開きながら立ち上がる。台部は「ハ」の字状に開き、裾端部は丸く収めている。内外面とも摩耗により調整は不明瞭である。色調は褐灰色を呈し、胎土は粗く、砂粒子を含んでいる。

#### IV. 包含層から出土した遺物

包含層からは須恵器の破片が10点（坏身片4点、坏蓋片4点、体部片1点、脚部片1点）、土師器の破片が40点（坏身片1点、高坏1点、高坏の坏部片3点、高坏の底部片1点、高坏の脚部片3点、増片1点、碗片4点、甕の把手2点、甕の口縁部片1点、口縁部片6点、体部片16点、底部片1点）、弥生土器の破片が161点（高坏の坏部片1点、高坏の脚部片4点、壺片1点、甕の体部片3点、甕の台部片2点、口縁部片4点、頸部片5点、体部片137点、底部片4点）の合計211点出土している。土器片の割合は、須恵器が5%、土師器が20%、弥生土器が75%を占め、弥生土器が優占している。このうち、図化が可能な須恵器5点、土師器15点、弥生土器4点を図示した。第10図1～5は須恵器、6～18と第11図19・20は土師器、21～24は弥生土器である。1は須恵器の坏蓋で、推定口径が13.80cm、器高が4.30cmある。丸味のある天井部から内湾しながら下がり、口縁部はさらに内湾する。端部は内側に斜めに面取している。外面の天井部はへら削り、体部下半から口縁部はナデ調整され、体部と口縁部の境に一条の太い沈線を施している。内面はナデ調整されている。色調は灰白色を呈し、胎土に雲母を含んでいる。2～5は須恵器の坏身片である。2は坏身の体部上半から口縁部にかけての破片で、推定口径が15.00cmある。体部上半は直線的に開き、口縁部との間に受けを持つ。口縁部は内傾する。内外面ともナデ調整されている。色調は灰白色を呈し、胎土は密で、白色・黒色粒子を含んでいる。3は坏身の底部から口縁部にかけての破片で、口縁端部を欠いている。推定最大径が13.00cmある。上げ底気味の底部から直線的に大きく開き、体部上位で内湾し、口縁部との間に受けを持つ。口縁部は内傾する。外面の底部はへら削りされ、一条の細い沈線を施し、体部上半から口縁部はナデ調整されている。内面は全体にナデ調整されている。色調は青灰色を呈し、胎土は密で、白色粒子を多く含んでいる。4は坏身の体部下半から口縁部にかけての破片で、推定口径が11.50cm、推定器高が5.20cmある。体部下半は内湾しながら立ち上がり、口縁部との間に受けを持つ。口縁部は高く、内傾する。外面は受け部の下位までへら削りされ、口縁部はナデ調整されている。内面はナデ調整され、口縁端部に一条の細い沈線を施している。色調は灰色を呈し、胎土は密で、白色・黒色粒子を多く含んでいる。5は坏身の底部から口縁部にかけての破片で、推定口径が12.20cm、器高が4.80cmある。平底から大きく開きながら立ち上がり、口縁部との間に受けを持つ。口縁部は高く、内傾する。外面の底部はへら削りされ、体部から口縁部はナデ調整されている。内面は全体にナデ調整されている。色調は灰色を呈し、胎土は密で、砂粒子を含んでいる。6・7は土師器の?片である。6は?の体部下半から口縁部にかけての破片で、推定口径が11.90cmある。体部下半から緩やかに内湾し、口縁部も内湾する。口縁端部を尖らせている。内外面とも摩耗により調整は不明瞭である。色調は橙色を呈し、胎土に砂粒子を少し含んでいる。7は?の底部から口縁部にかけての破片で、推定口径が12.00cm、器高が4.70cmある。平底から内湾し、口縁部も内湾する。口縁端部を尖らせている。内外面とも摩耗により調整は不明瞭である。色調は赤色を呈し、胎土に砂粒子を含んでいる。8は土師器の坏身で、推定口径が12.00cm、器高が4.00cmある。丸底から大きく開きながら立ち上がり、口縁部はやや内湾気味である。内外面とも摩耗により調整は不明瞭である。色調は橙色～灰褐色を呈し、胎土は粗く、1mm大の砂粒子を多く含んでいる。9～13は土師器の高坏片である。





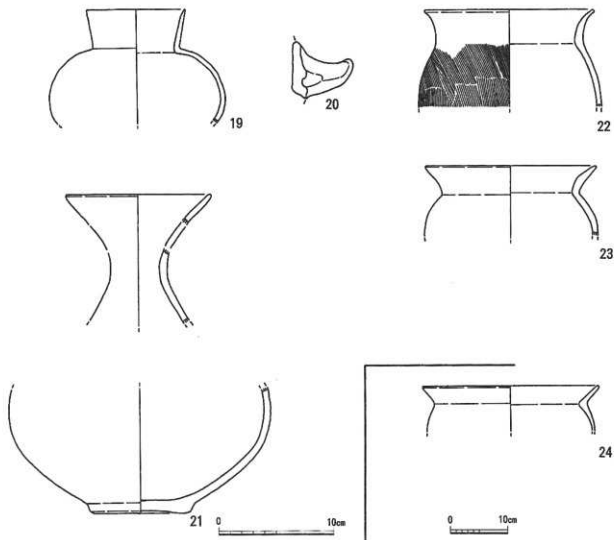
第10図 包含層から出土した土器の実測図(1)

1 須恵器の坏蓋、2~5 須恵器の坏身片、6・7 土師器の7片、8 土師器の坏身、  
9~13 土師器の高坏片、14~18 土師器の高坏の脚部片

9は高環の環部片と思われ、推定口径が10.70cmある。内湾しながら立ち上がり、口縁端部を尖らせている。内外面とも摩耗により調整は不明瞭である。色調は灰色を呈し、胎土は密である。10は高環の環部片で、推定口径が14.60cmある。底部から開きながら立ち上がり、段を持つ。口縁部は直線的に開く。内外面とも摩耗により調整は不明瞭である。色調は赤色を呈し、胎土は粗い。11は高環の環部の底部から体部上半にかけての破片で、口縁部と脚部を欠いている。底部から直線的に大きく開き、体部下半で屈曲し、緩やかに外反する。内外面とも刷毛目痕が見られる。色調は外面が灰白色～褐灰色を呈し、内面が灰白色を呈している。胎土は密で、2mm大の砂粒子を含んでいる。12は高環で、口縁部が1/3、脚部が1/6残存している。推定口径が15.70cm、推定器高が10.70cmある。環部は平底から直線的に大きく開き、口縁部に歪みがある。脚部は空洞部が浅く、「ハ」の字状に開き、裾部は平らに開く。内外面とも摩耗により調整は不明瞭である。色調は橙色を呈し、胎土に赤色粒子を多く含んでいる。13は高環で、脚部の下半を欠いている。推定口径が13.90cmある。環部は平底から内湾しながら立ち上がり、口縁部は外反する。脚部は「ハ」の字状に開く。内外面とも摩耗により調整は不明瞭である。色調は淡赤橙色を呈し、胎土に砂粒子を含んでいる。14～18は土師器の高環の脚部片である。14は高環の脚部片で、裾部を欠いている。環部は丸底で、接合部から「ハ」の字状に直線的に開く。内外面とも摩耗により調整は不明瞭である。色調は淡褐色を呈し、胎土は粗い。15は高環の脚部片で、裾端部を欠いている。接合部から「ハ」の字状に直線的に開き、裾で屈曲し、さらに大きく開く。空洞部は高い。外面は摩耗により調整は不明瞭である。内面は空洞部にしぼり痕が見られ、裾の屈曲部に繋ぎ目痕がある。色調は赤褐色を呈し、胎土は粗い。16は高環の脚部片で、裾部を欠いている。環部は丸底と思われる。脚部は「ハ」の字状に開くが狭く、裾部で屈曲し、大きく開く。外面はナデ調整され、内面は摩耗により調整は不明瞭である。色調は淡赤褐色を呈し、胎土は密で、砂粒子を含んでいる。17は高環の脚部片で、裾部を欠いている。環部は丸底と思われる。脚部は「ハ」の字状に開くが狭く、裾部で屈曲し、大きく開くと思われる。内外面とも摩耗により調整は不明瞭である。色調は淡赤褐色を呈し、胎土は密で、砂粒子を含んでいる。18は高環の脚部片で、裾端部を欠いている。接合部から「ハ」の字状に開き、裾で屈曲し、さらに大きく開く。空洞部は高い。外面は刷毛目痕が見られ、内面は空洞部にしぼり痕、繋ぎ目痕、指頭痕が見られ、裾部に刷毛目痕が見られる。色調はぶい黄褐色を呈し、胎土に1～2mm大の砂粒子を含んでいる。

第11図19は土師器の埴の体部から口縁部にかけての破片で、口径が8.50cm、最大径が15.30cmある。体部は球形を呈し、体部下半から内湾しながら頸部にいたり、「く」の字状に屈曲し、口縁部は直線的に開き、端部を尖らせている。内外面とも摩耗により調整は不明瞭である。色調は赤褐色を呈し、胎土に1～2mm大の砂粒子を多く含んでいる。20は土師器の甗の把手で、長さが3.90cm、幅が3.00cmある。形状は牛角状を呈し、上面に刷毛目痕が見られる。色調は灰黄褐色を呈し、胎土に1～3mm大の砂粒子を含んでいる。21は弥生土器の壺の底部から体部中位、頸部、口縁部の破片で、推定口径が12.40cm、体部の推定最大径が22.80cm、推定底径が7.90cmある。上げ底気味の底部から直線的に大きく開き、体部下半で最大径となり、内湾する。肩部は緩やかに内傾し、頸部から外反して口縁部は直線的に開いている。内外面とも摩耗により調整は不明瞭である。色調は、外面は赤色を、内面は褐灰色を呈し、胎土は粗く、1～3mm大の砂粒子を多く含んでいる。22～24は弥生土器の甗片である。22は体部中位から口縁部にかけての破片で、推定口径が14.80cmある。体部上半は緩やかに内傾し、頸部は緩やかに開きながら外反し、口縁部はさらに外反する。外面の肩部から体部上半に刷毛目痕が見られる。内面は摩耗により調整は不明瞭である。色調はぶい橙色を呈し、胎土は粗く、1～3mm大の砂粒子を多く含んでい

る。23は体部上半から口縁部にかけての破片で、推定口径が14.60cmある。体部上半は緩やかに内傾し、頸部は「く」の字状に屈曲し、口縁部は直線的に開く。端部は丸く収めている。内外面とも摩耗により調整は不明瞭である。色調は明赤褐色を呈し、胎土は粗く、砂粒子を含んでいる。24は体部上半から口縁部にかけての破片で、推定口径が30.60cmある。頸部は「く」の字状に屈曲し、口縁部は直線的に開く。端部は丸く収めている。内外面とも摩耗により調整は不明瞭である。色調は明赤褐色を呈し、胎土は粗く、白色粒子を多く含んでいる。

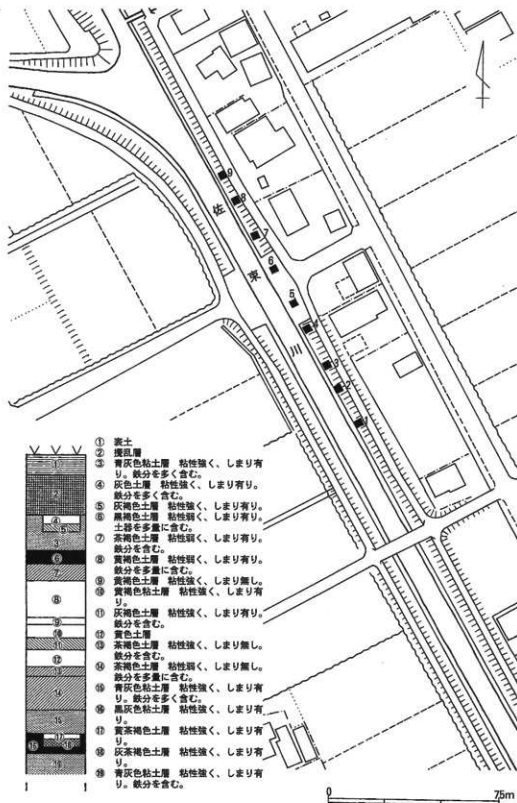


第11図 包含層から出土した土器の実測図(2)

19 土師器の破片、20 土師器の甔の把手、21 弥生土器の壺片、22~24 弥生土器の壺片

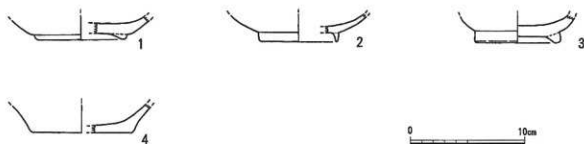
## V. 確認調査について

設定されたグリッドの内、第1・第2・第3・第4・第7・第8・第9グリッドから遺物が出土している。しかし、遺構は確認されなかった。



第12図 確認調査 グリッド配置図 及び グリッド基本層序図

第1グリッドからは、須恵器が14点、土師器が4点、弥生土器が3点の合計21点出土している。表土層からは須恵器の高台付き底部片が1点、2層（攪乱層）からは須恵器の体部片が1点、土師器の体部片が1点、底部片が1点、弥生土器の体部片が3点の計6点、6層からは須恵器の底部片1点、7層からは須恵器の口縁部片2点、体部片6点、高台付き底部片3点、土師器の体部片1点、底部片1点の計13点である。須恵器・土師器は上層から下層にかけて出土し、弥生土器が出土したのは攪乱層である。このうち、図化が可能な須恵器3点、土師器1点を図示した。第13図1～3は須恵器、4は土師器である。1は須恵器の坏身の底部片で、推定高台径が7.80cmある。平底から大きく開いて立ち上がる。断面が三角形の低い貼り付け高台が付く。外面の高台内に回転糸切り痕が見られ、底部はヘラ削りの後、ナデ調整している。内面はナデ調整している。色調は灰白色を呈し、胎土は密である。2は須恵器の坏身の底部片で、推定高台径が6.70cmある。平底から緩やかに内湾しながら立ち上がる。断面が細長い三角形の貼り付け高台が付く。内外面ともナデ調整している。色調は灰白色を呈し、胎土は密で、黒色粒子を含んでいる。3は須恵器の坏身の底部片で、高台径が7.30cmある。平底から内湾して立ち上がる。断面が台形の貼り付け高台が付く。外面の高台内に回転糸切り痕が見られ、高台と底部はナデ調整している。内面はナデ調整している。色調は灰白色を呈し、胎土は密である。4は土師器の壺の底部片で、推定底径が8.90cmある。平底から直線的に大きく開いて立ち上がる。内外面とも摩耗により調整は不明瞭である。底部外面に木葉痕が見られる。色調は外面がにぶい赤褐色、内面が灰黄褐色を呈し、胎土は粗く、砂粒子を多く含んでいる。



第13図 第1グリッドから出土した土器の実測図

1～3 須恵器坏身の底部片、4 土師器壺の底部片

第2グリッドからは、須恵器が1点、土師器が8点、弥生土器が6点の合計15点出土している。5層からは土師器の体部片が1点、甕の把手が1点の計2点、7層からは須恵器の体部片が1点、土師器の体部片が6点、弥生土器の口縁部片が1点、体部片が3点、底部片が2点の計13点である。須恵器・土師器・弥生土器ともには下層の7層から一緒に出土している。このうち、図化が可能な弥生土器の壺の口縁部片1点を図示した。第14図1は壺の折返し口縁の破片である。内外面とも摩耗により調整は不明瞭である。色調は淡赤褐色を呈し、胎土に褐色・黒色粒子を含んでいる。



第14図 第2グリッドから出土した土器の実測図

1 弥生土器壺の口縁部片

第3グリッドからは、須恵器が2点、土師器が4点、弥生土器が7点の合計13点出土している。表土層からは須恵器の高台付き底部片が1点、5層からは須恵器の口縁部片が1点、土師器の体部片が4点、弥生土器の体部片が3点の計8点、6層からは弥生土器の体部片4点である。須恵器・土師器は上層から出土し、下層の6層は弥生土器のみの出土である。図化が可能な土器は無い。

第4グリッドからは、須恵器が3点、土師器が2点の合計5点出土している。いずれも4層からの出土で、須恵器の坏蓋が1点、体部片が2点、土師器の体部片が2点である。弥生土器は出土していない。このうち、図化が可能な須恵器の坏蓋1点を図示した。第15図1は須恵器の坏蓋で、推定口径が13.80cm、推定器高が3.70cmある。平らな天井部から緩やかに内湾しながら下がり、口縁部は垂直に下がる。端部は外反する。外面の天井部はへら削り、体部はナデ調整している。口縁部との境に一条の沈線を施し、口縁部はナデ調整している。内面は全体にナデ調整している。色調は灰色を呈し、胎土は密で、黒色粒子を多く含んでいる。

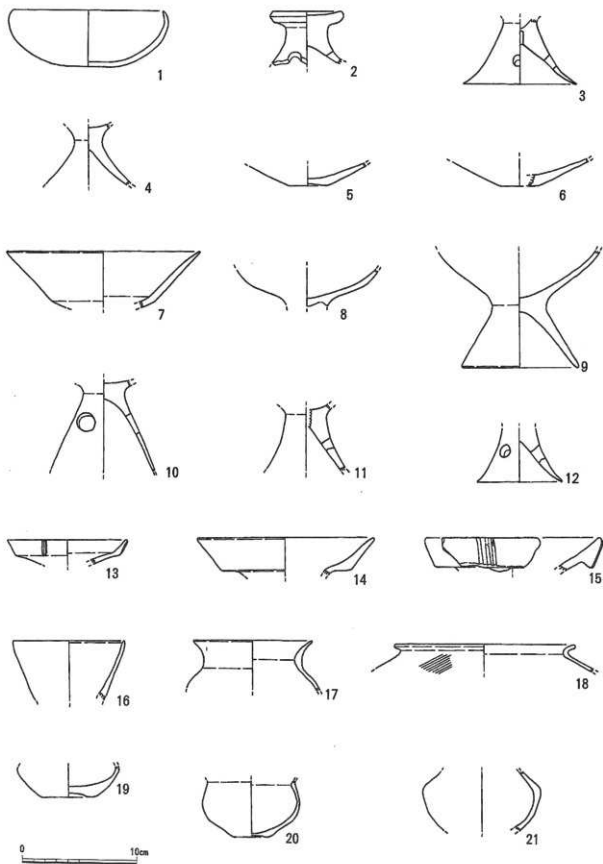


第15図 第4グリッドから出土した土器の実測図

1 須恵器の坏蓋

第7グリッドからは、土師器が1点、弥生土器が28点の合計29点出土している。いずれも黄色土層上面からの出土で、土師器の体部片が1点、弥生土器の口縁部片が1点、頸部片が3点、体部片が22点である。土師器は僅かに1点の出土で、弥生土器が優占的に出土している。図化が可能な土器は無い。

第8グリッドからは、土師器が134点、弥生土器が983点の合計1,117点出土している。出土量は弥生土器が88%を占めている。黒褐色土層からは土師器の口縁部片が3点、体部片が121点、底部片が4点、脚部片が6点、弥生土器の口縁部片が16点、頸部片17点、体部片が880点、底部片15点（うち平底11点）、台部片27点、高環2点、高環脚部片10点、壺1点、土製品1点の計1,103点である。黄茶褐色土層からは弥生土器の体部片が14点出土したのみである。このうち、図化が可能な土師器6点、弥生土器28点を図示した。第16図1～6は土師器、7～21と第17図22～34は弥生土器である。1は土師器の?で、口径が13.10cm、器高が4.90cmある。平らな底部から内湾しながら立ち上がり、口縁部でさらに内湾し、端部を尖らせている。内外面とも摩耗により調整は不明瞭である。色調は橙色を呈し、胎土は密で、赤色粒子を含んでいる。2は土師器の器台片と思われる。上面は僅かに窪んでいる。脚部は「ハ」の字状に開き、三方向に孔が空けられている。内外面とも摩耗により調整は不明瞭である。色調は橙色～褐灰色を呈し、胎土は密である。3は土師器の高環の脚部片で、推定脚部径が10.00cmある。脚部は「ハ」の字状に開き、四方向に径9mmの孔が空けられている。空洞部の頂点に、径5mm、深さ11.5mmの穴がある。内外面とも摩耗により調整は不明瞭である。色調は橙色を呈し、胎土は密である。4は土師器の高環の脚部片である。環部の底部は丸底で、脚部は「ハ」の字状に大きく開く。内外面とも摩耗により調整は不明瞭である。色調は橙色を呈し、胎土は密である。5は土師器の壺の底部で、底径が3.50cmある。やや上げ底気味の底部から直線的に大きく開く。内外面とも摩耗により調整は不明瞭である。色調は橙色を呈し、胎土は密で、砂粒子を含んでいる。6は土師器の壺の底部で、推定底径が3.60cmある。径の小



第16図 第8グリッドから出土した土器の実測図(1)

1~6 土師器、7~21 弥生土器

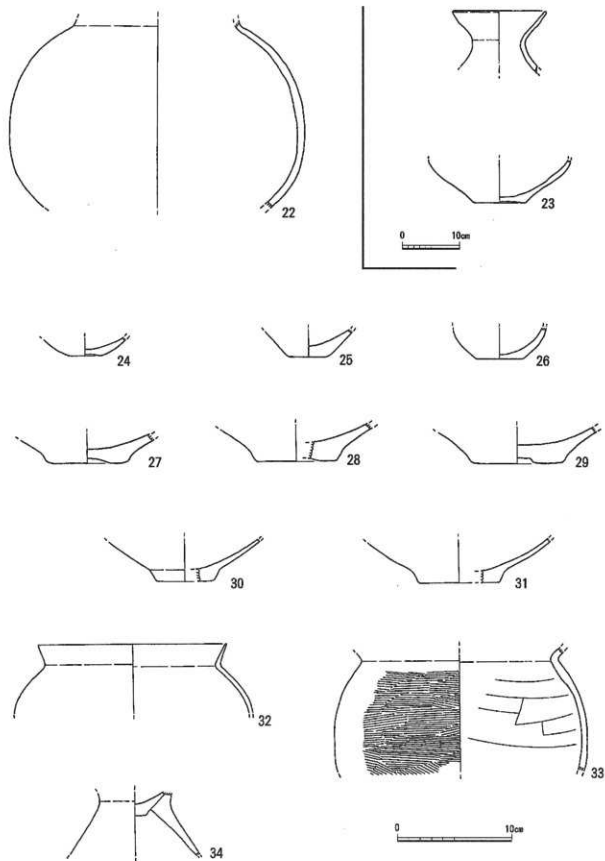
さい平底から直線的に大きく開いて立ち上がる。内外面とも摩耗により調整は不明瞭である。色調は淡橙色を呈し、胎土は密で、砂粒子を僅かに含んでいる。7は弥生土器の高環の坏部片で、推定口径が16.80cmある。体部下半で屈曲し、直線的に大きく開く。内外面とも摩耗により調整は不明瞭である。色調は淡橙色を呈し、胎土は密である。8は弥生土器の高環の坏部である。丸底から大きく開き、体部中位で僅かに内湾する。内外面とも摩耗により調整は不明瞭である。色調はにぶい橙色を呈し、胎土は密で、砂粒子を含んでいる。9は弥生土器の高環で、口縁部を欠いている。推定脚部径が13.00cmある。坏部は丸底から直線的に開きながら立ち上がり、体部上半で内湾する。脚部は「ハ」の字状に開き、裾端部は丸く収めている。内外面とも摩耗により調整は不明瞭である。色調はにぶい橙色を呈し、胎土に1~3mm大の砂粒子を多量に含んでいる。10は弥生土器の高環の脚部で、脚部は「ハ」の字状に開く。器壁は薄い。三方向に径1.60cmの孔が空けられている。内外面とも摩耗により調整は不明瞭である。色調は橙色を呈し、胎土は密で、砂粒子を含んでいる。11は弥生土器の高環の脚部で、脚部は「ハ」の字状に開く。二方向に径0.90cmの孔が空けられている。内外面とも摩耗により調整は不明瞭である。色調はにぶい褐色を呈し、胎土に1~2mm大の砂粒子を含んでいる。12は弥生土器の高環の脚部で、脚部は「ハ」の字状に開く。三方向に径1.20cmの孔が空けられている。裾端部は外反する。内外面とも摩耗により調整は不明瞭である。色調は橙色を呈し、胎土は密で、雲母を含んでいる。13は弥生土器の壺の口縁部片で、推定口径が10.40cmある。頸部から大きく開き、口縁部は屈曲し、直線的に開く。口縁部外面に棒状浮紋(1本)を施している。内外面とも摩耗により調整は不明瞭である。色調は浅黄褐色を呈し、胎土に砂粒子を僅かに含んでいる。14は弥生土器の壺の口縁部片で、推定口径が15.40cmある。頸部で屈曲し、口縁部は大きく開き、複合口縁を呈している。内外面とも摩耗により調整は不明瞭である。色調は褐色を呈し、胎土に1~3mm大の砂粒子を多く含んでいる。15は弥生土器の壺の口縁部片で、推定口径が15.20cmある。口縁部は直線的に開くが、僅かに内湾する。複合口縁で、棒状浮紋(1単位3本)を施している。内外面とも摩耗により調整は不明瞭である。色調は浅黄褐色を呈し、胎土は密である。16は弥生土器の壺の口縁部片で、推定口径が9.70cmある。口縁部は直線的に開き、端部がやや内湾する単純口縁である。内外面とも摩耗により調整は不明瞭である。色調はにぶい橙色を呈し、胎土に1mm大の砂粒子を多量に含んでいる。17は弥生土器の壺の口縁部から肩部にかけての破片で、推定口径が10.30cmある。肩部は緩やかに内傾し、頸部は「く」の字状に屈曲し、口縁部は直線的に開く。内外面とも摩耗により調整は不明瞭である。色調はにぶい橙色を呈し、胎土は粗く、1~2mm大の砂粒子を多く含んでいる。18は弥生土器の壺の口縁部から肩部にかけての破片で、推定口径が15.60cmある。肩部は直線的に内傾し、頸部は「く」の字状に丸く屈曲する。口縁端部は丸く収めている。外面の肩部に刷毛目痕が見られ、内面は摩耗により調整は不明瞭である。色調はにぶい橙色を呈し、胎土に径1mm以下の砂粒子を多く含み、また雲母・石英粒も含んでいる。19は弥生土器の小型壺の底部から体部下半にかけての破片で、推定最大径が9.00cm、底径が4.50cmある。上げ底の底部から内湾しながら立ち上がり、体部中位で最大径を持ち、内湾する。内外面とも摩耗により調整は不明瞭である。色調は外面がにぶい褐色を、内面は褐色を呈し、胎土に1~2mm大の砂粒子を多く含んでいる。20は弥生土器の小型壺の底部から頸部にかけての破片で、推定最大径が8.60cm、底径が3.00cmある。上げ底の底部から直線的に開きながら立ち上がり、体部中位に最大径を持ち、内傾する。内外面とも摩耗により調整は不明瞭である。色調はにぶい橙色を呈し、胎土は密である。21は弥生土器の小型壺の体部片で、推定最大径が10.40cmある。体部下半は内湾しながら立ち上がり、体部上半に最大径を持ち、内傾する。内外面とも摩耗により調整は不明瞭である。色調は褐色を呈し、胎土は粗く、雲母、白色粒子、砂粒子を多量に含んで



いる。

第17図22は弥生土器の壺の体部片で、推定最大径が26.00cmある。体部は球形を呈している。内外面とも摩耗により調整は不明瞭である。色調はにぶい橙色を呈し、胎土は粗く、1～2mm大の砂粒子を多量に含んでいる。23は弥生土器の壺の底部から体部下半と、頸部から口縁部にかけての破片で、推定口径が16.80cm、推定底径が9.20cmある。やや上げ底気味の底部から直線的に大きく開きながら立ち上がり、体部下半で内湾する。頸部は緩やかに「く」の字状に屈曲し、口縁部は直線的に開く。内外面とも摩耗により調整は不明瞭である。色調は灰色を呈し、胎土は脆く、1～2mm大の砂粒子を多量に含んでいる。24は弥生土器の小型壺の底部片で、底径が2.80cmある。上げ底の底部からやや内湾気味に大きく開きながら立ち上がる。内外面とも摩耗により調整は不明瞭である。色調は橙色を呈し、胎土に砂粒子を僅かに含んでいる。25は弥生土器の小型壺の底部片で、底径が3.10cmある。平底から直線的に大きく開きながら立ち上がる。内外面とも摩耗により調整は不明瞭である。色調は灰褐色を呈し、胎土に1～3mm大の砂粒子を多く含んでいる。さらに褐色粒子を含んでいる。26は弥生土器の小型壺の底部片で、底径が4.10cmある。平底から内湾しながら立ち上がる。内外面とも摩耗により調整は不明瞭である。色調はにぶい橙色を呈し、胎土は密で、褐色粒子を含んでいる。27は弥生土器の壺の底部片で、底径が6.00cmある。上げ底の底部から直線的に大きく開きながら立ち上がる。内外面とも摩耗により調整は不明瞭である。色調は浅黄褐色を呈し、胎土は密で、砂粒子を含んでいる。28は弥生土器の壺の底部片で、推定底径が6.80cmある。上げ底の厚い底部から直線的に大きく開きながら立ち上がる。内外面とも摩耗により調整は不明瞭である。色調はにぶい褐色を呈し、胎土に砂粒子を多く含んでいる。29は弥生土器の壺の底部片で、底径が7.90cmある。上げ底の厚い底部から直線的に大きく開きながら立ち上がる。内外面とも摩耗により調整は不明瞭である。色調は橙色を呈し、胎土に1～3mm大の砂粒子を多量に含んでいる。30は弥生土器の壺の底部片で、推定底径が3.85cmある。平底から大きく開いて立ち上がる。内外面とも摩耗により調整は不明瞭である。色調はにぶい黄褐色～黄灰色を呈し、胎土は粗く、1～3mm大の砂粒子を多く含んでいる。31は弥生土器の壺の底部片で、推定底径が7.00cmある。厚い平底から大きく開きながら内湾して立ち上がる。内外面とも摩耗により調整は不明瞭である。色調は橙色を呈し、胎土は粗く、1mm大の砂粒子を多量に含んでいる。32は弥生土器の甕の口縁部から肩部にかけての破片で、推定口径が16.40cmある。肩部は緩やかに内傾し、頸部は「く」の字状に屈曲し、口縁部は直線的に開く。内外面とも摩耗により調整は不明瞭である。色調はにぶい橙色を呈し、胎土に1～2mm大の砂粒子を多く含んでいる。33は弥生土器の甕の体部から頸部にかけての破片で、推定最大径が22.50cmある。体部中位は内湾しながら立ち上がり、体部上半に最大径を持つ。緩やかに内傾した後、頸部は「く」の字状に屈曲する。外面に刷毛目痕が見られ、内面は板ナデ調整されている。色調は褐灰色を呈し、胎土は粗く、1～3mm大の砂粒子を多く含んでいる。34は弥生土器の甕の台部片で、「ハ」の字状に開いている。内外面とも摩耗により調整は不明瞭である。色調は橙色を呈し、胎土は粗く、1～2mm大の砂粒子を多量に含んでいる。

第9グリッドからは、陶器片が1点、弥生土器の体部片が11点の12点出土している。いずれも2層からの出土で、攪乱層と思われる。図化が可能な土器は無い。



第17図 第8グリッドから出土した土器の実測図(2)

22~34 弥生土器

## VI. まとめ

1号土坑からは須恵器・土師器・弥生土器の破片が出土し、弥生土器片が79%を占めているが、弥生土器の器種・型式を判断できる破片はない。図示した須恵器の灯臺は推定口径が15.60cmあり、坏身は口縁部が内傾して立ち上がり、推定最大径が14.80cmあることから6世紀後半に位置付けられ、土師器の高坏の坏部は鉢形土器の様相を呈していることから6世紀に位置付けられる。しかし、1号土坑が掘られた年代を決定できる資料とは言えない。

2号土坑からは須恵器・土師器・弥生土器の破片が出土し、弥生土器片が77%を占めているが、弥生土器の器種・型式を判断できる破片はない。図示した土師器の模倣坏臺、鉢形土器の様相を呈する高坏の坏部や裾部が大きく屈曲する脚部（青山式土器を思わせる）、甕の形態などから6世紀に位置付けられる。しかし、1号土坑と同様に、土坑が掘られた年代を決定できる資料とは言えない。

溝状遺構の上面から出土した土器類は須恵器が1点、土師器が15点、弥生土器が33点で、弥生土器片が67%を占めているが、弥生土器の器種・型式を判断できる破片は少ない。須恵器の坏身は遠考研編年第二期に相当し、6世紀前半に位置付けられる。土師器の埴はやや厚い平底で、5世紀後葉の宮之腰式土器に類似している。溝状遺構の覆土から出土した土器類は須恵器が1点、土師器が14点、弥生土器が549点で、弥生土器片が97%を占めている。土師器の高坏は鉢形土器の様相を呈する坏部と高脚を有し、6世紀に位置付けられる。弥生土器の壺の口縁形態は、単純口縁と複合口縁の2種がある。単純口縁は細く締まった頸部からラップ状に大きく開くもので、口唇部と口縁部内面に紋様を施している。複合口縁は口縁部が内湾し、外面に棒状浮紋を施すものなどが見られ、菊川式土器の新様式すなわち弥生時代後期後半に編年付けられる。

包含層から出土した土器類は須恵器が10点、土師器が40点、弥生土器が161点で、その割合は須恵器が5%、土師器が20%、弥生土器片が75%を占めており、やはり弥生土器が優占している。遺物の内容は、土坑・溝状遺構から出土した遺物とほぼ同じである。

以上のように、今回の調査で出土した土器類は、弥生土器が優占し、次いで土師器が多く、須恵器は非常に少ない。土坑は土器類が混在しているが、溝状遺構の覆土から出土した土器類は弥生土器が97%を占めており、遺構の年代も弥生時代後期に編年付けられる。また、弥生土器・土師器の中に高坏が多く含まれており、この遺跡の特徴としてあげられる。高坏は日用土器としても存在するが、祭祀用土器としても発達が著しいため、遺跡内に祭祀に関係する遺構の存在が考えられる。

昭和63年6月～8月に実施された第一次調査では、土坑3基、井戸址1基、溝状遺構3条、ピット4基が確認され、井戸址からは5世紀の高坏と13世紀前半～14世紀前半の山茶碗が共存し、溝状遺構からは9～10世紀前後の須恵器・かわらけ・高坏・瓶の把手・山茶碗などが出土し、遺構以外から出土した土器類は大部分が中世の遺物で、それらに須恵器や土師器が混在していた。同じ昭和63年11月に実施された確認調査では住居址と思われる隅丸形状の土坑が1基確認され、覆土から確認された土師器片と土坑が確認された地層から出土した灰釉陶器片から、8～9世紀の土坑と位置付けられている。遺構以外からは土師器・須恵器・山茶碗・陶磁器が出土したが、土師器片が大部分を占めており、土器の年代は5世紀後半から6世紀に編年付けられている。

しかし、昭和63年度調査では弥生時代の遺構・遺物が全く確認されていないのに対し、今回の調査で出土した遺物は弥生土器の占める割合が非常に高く、逆に山茶碗・かわらけなど中世の遺物がない。第

一次調査から今回の調査までの結果を踏まえると、中方遺跡は弥生時代後期から中世に到る複合遺跡であり、しかも広範囲であることが理解できる。

また、中方遺跡の存する地域は佐東（さづか）と呼ばれている地区で、倭名類聚抄には「遠江国城飼郡狭束郷」の記載があり、さらに「狭束郷戸主……」と墨書された磐田市出土の木簡が報告されている。佐東川の兩岸の丘陵斜面には、横穴群が数多く存在し調査が行われているが、集落跡や住居址は確認されていない。こうした中で、当該周辺地域に「狭束郷」が存在し、郡衙などの役所的施設が存した可能性が考えられ、弥生時代から連綿と続く地域であったと思われる。但し、今回の調査は河川堤防という極めて限定された範囲であり遺跡全容は把握しきれなかったため、調査結果が直ちに郡衙と結び付けるには資料的に乏しく、今後の周辺の調査を待ちたい。

## 中 方 遺 跡 Ⅱ

平成 2 年 3 月 発 行

編 集 ・ 発 行 : 静 岡 県 小 笠 郡 大 東 町 教 育 委 員 会

〒437-14 静 岡 県 小 笠 郡 大 東 町 三 俣 620 番 地

電 話 : 0537-72-2211 (代)

印 刷 : 株 式 会 社 三 創

〒422-80 静 岡 県 静 岡 市 中 村 町 166 番 地 の 1

電 話 : 0542-82-4031



1 中方遺跡 作業風景 (上層部)



2 中方遺跡 作業風景 (下層部)



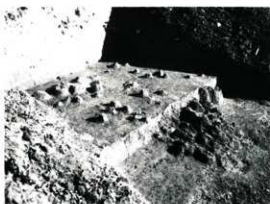
3 1号土坑 遺物出土状態



4 遺物包含層 遺物出土状態



5 溝状遺構 完掘状況



6 第8グリッド 遺物出土状態



7 1号土坑出土 須恵器 坏身 (第5図2)



8 溝状遺構 上面出土 土師器 埴 (第7図3)





1 溝状遺構 覆土出土 弥生土器 壺 (第8図12)



2 溝状遺構 覆土出土土器



3 溝状遺構 覆土出土土器



4 溝状遺構 覆土出土土器



5 包含層出土 須恵器 坏身 (第10図5)



6 包含層出土 土師器 高坏 (第10図12)



7 包含層出土 土師器 埴 (第11図19)



8 第8グリッド出土土器







